# 観光地区の街路景観デザインに関する考察

京都大学工学部　正　員　　佐佐木　綱
京都大学工学部　正　員　　川崎　雅史
京都大学工学部　学生員　　河西　茂行
京都大学工学部　学生員　○小長井由隆

## 1．はじめに

現在まで、街路景観を対象に、内外で多くの研究が蓄積されてきたが、その大部分は心理実験による評価や知覚認知に関するものであった。しかし、街路のもつ多義的な意味を表現する言語や視覚情報の抽出と整理を現実との対応で詳細に記述するといった研究姿勢は少ない。そこで、本研究は観光港湾地区の街路景観を対象に、景観把握のための構成や評価に関する概念の規定を行い、その概念を実際空間の中で文や図で記述することによって実証したものである。

本研究では、景観把握を、構成と評価のふたつの面に分け、それらに対して新たな定義を与えた。構成はなるべく感情や評価言語レベルでの規定は避け、面の分節による類型や視線、光と影といったより客観的側面で表現した。評価においても基本的な輪郭線による空間の秩序性を提起した。

## 2．神戸北野町とプレサーベィ

景観把握の視点を得るため、神戸北野町を対象にプレサーベィを行い、写真収集と景観記述を行った。

神戸北野町は港から約1km程北へ六甲の山並に近い所に位置し、異人館やファッション店が点在する街路、狭く細い坂道などその散策コースには多様な街路が存在する観光地区である。そこで、これらの散策街路をプレサーベィの対象地区として選択した。

調査日は10月15日、10月16日の両日である。

## 3．景観の構成

本研究では景観デザイン調査を実施するにあたって街路景観の構成を次のように考えた。

それは、一般の人々にある程度共通して、①景観へ積極的に観入するための行動に誘い②行動・視線を支配すべき心理状態に影響を及ぼすものであり、「景観観入のための空間場のもつかたち・状態の総体」の意味で、あるマクロな構成的な側面からみた型なるものと規定した。

(1)視界と面の分節による構成の代表的形態発現

前述のようなマクロな街路景観の構成を把握するために、神戸北野町に関するプレサーベィの収集写真を資料として景観構成を規定する視界と面の分節による代表的形態発現の抽出を行った。

要素のレベルは切り捨てて考察した結果、形態発現に対して、図1に示す5つの類型が得られた。視界のあり方によって、坂道が視界の上下変化、小径が視界の焦点、曲折した道が視界の分節、開かれた道が視界の開放、高台・視点場が視界の自由を示す。面構成は図1に示された。

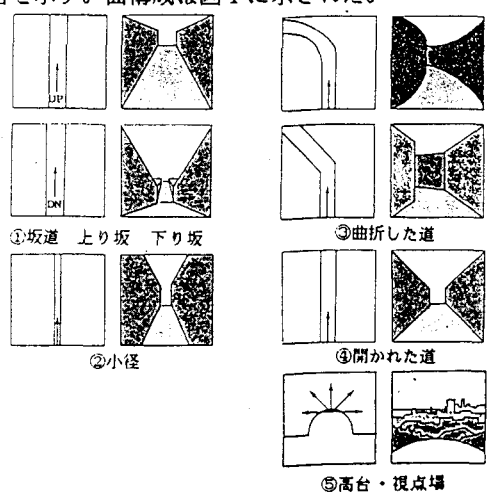


図1　景観構成の代表的形態発現

(2)構成が促す視線の誘導

景観の構成の差異によって、視線の誘導の分類も行った。考察の結果、集中・分散・漠然・注目

Tsuna SASAKI,Masashi KAWASAKI,Shigeyuki KAWANISHI,Yoshitaka KONAGAI

・眺望・流れ対話に分類できた。

(3)構成が引き起こす現象～光と影

構成の形態が引き起こす客観的な現象として「光と影」に着目した。プレサーベィ結果の考察をもとに代表的発現の中で特に特徴の現れる坂道、小径、曲折した道の例にもとづいて記述した。その結果、光と影の対比、光と影の装飾、光がいきた空間、影がいきた空間、影の律動の５つの効果を得た。写真例を、図２に示した。

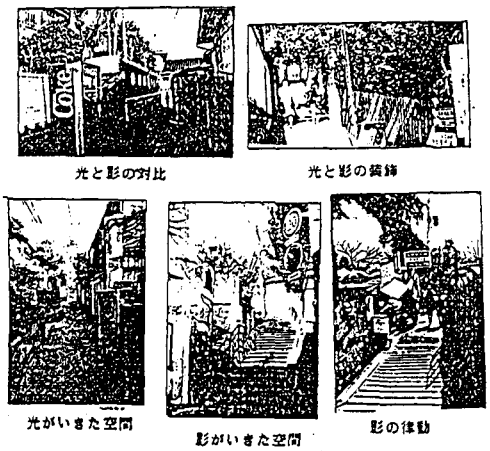


図２　光と影

## ４．景観の評価

景観を構成する要素と要素の識別をする際に、要素間の境界は景観の場合輪郭線であり、これが視覚に映ることによって識別が行われる。この線によりテクスチュアや色彩以外の形態が表現可能となる。この線のことを、「基本輪郭線」と名付けた。この線が密であるか粗であるかによって構成の形態を把握することができる。また、この線にある一定の規則性が存在するかしないかをみることによって、ゲシュタルト（視覚秩序）を構成する状態の明快性を評価することができる。街路景観の評価の分析視点である輪郭線群に関連する用語として次の言語を選択した。

1)粗と密：基本輪郭線の数が多い、少ないの定量的評価概念であり、多用性の側面を示す指標となる。

2)整然と雑然：量的な評価ではなく、構成要素が一定の規則にしたがって配列をなしているかどうかの視覚の秩序性（ゲシュタルト）を示す評価概念である。

## ５．景観デザイン調査の実施

前述した景観の構成と評価に関する視点に従って、北野町の街路景観についてデザインシートを作成し、修景の問題点と提案について考察した。以下に、その中の１例を図３に示した。

街路全体として基本輪郭線は密であり、雑然としている。看板や電柱の輪郭線の方向は水平、垂直方向に限られるが、線の長さが不揃いで、垂直線と水平線の交差点が多く、一定の規則性がみあたらないためゲシュタルトを形成しにくい。

視界は開かれているが、左右の沿道の輪郭線の様子の不揃いから生じるバランス感の欠如から、軸線が明確でない。また、道の焦点部分は輪郭線が連続的に密になっているため、境界となって現れてこない。

景観整備の方針として、輪郭線の方向を一定にして、道の領域に線をはみ出させないことが挙げられる。具体的には、歩道を整備して歩道と車道の境界線を明確にする。建物の壁面を後退させて道路上の空間に看板などを侵食させない。街灯などによって垂直線を強調し、それらがつくるリズム感によって、電柱などの垂直方向のノイズを目立たなくする等である。

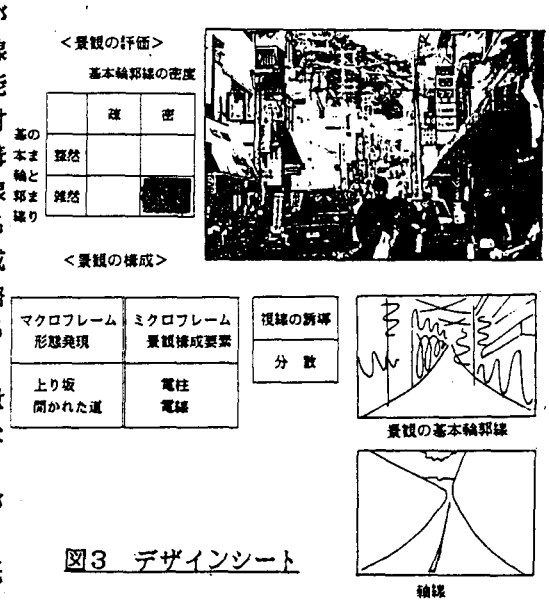


図３　デザインシート